

曲目解説

ドイツのロマン的歌劇の創始者として音楽史上に名を残すウェーバーは、その代表作「魔弾の射手」を1820年、34歳のときに完成して、ベルリン楽壇の注目を集めた後も二つの歌劇を作曲しました。「オイリアンテ」と「オベロン」です。そして、この「オベロン」はウェーバー最後の作品となり、1826年4月12日、ロンドンのコヴェント・ガーデンでの初演後二ヶ月足らずで、ウェーバーは肺病のため、旅先イギリスでこの世を去ることになります。初演で大成功を収めたこの歌劇の梗概は次の通りです。“妖精の国の王様オベロンは王妃タイタニアと些細な口論から、どんな困難や誘惑にも負けずに愛し合う男女を見るまでは和解しない、という話にまで行き着いてしまう。オベロンはヒュオンという若い騎士を候補にし、危険に遭ったらこれを吹いて自分を呼べ、と言って魔法の角笛を彼に授ける。そして、オベロンの魔法でヒュオンは、バグダッドの太守の娘レズミアと相愛になる。二人は、オベロンの魔法の角笛の助けを借りながら、様々な困難を乗り越って一緒になり、一方オベロンも妻タイタニアと和解する。” 序曲は、「魔弾の射手」の序曲と同様に歌劇中のいくつかの主要旋律を使い、序奏の付いたソナタ形式で作られています。曲は、オベロンの吹く魔法の角笛を表すホルンで始まり、妖精達の動き回る様子を暗示する木管楽器の旋律や弦楽器の柔らかな響きで妖精の国を描き出します。突然、全合奏で二長調の属和音が強奏されると場面は人間世界に一転します。二人の強い愛や暴風雨の様子などを描写しつつ、輝かしい高揚の内に締めくくられます。

クラリネットは、通常オーケストラで使われる他の三つの木管楽器（フルート、オーボエ、ファゴット）に比べるとその完成や一般化はずっと歴史が浅いのですが、音域の広さ、音色の多様さなど優れた表現力を秘めています。そのクラリネットの魅力を十二分に発揮した最初の作品が、モーツァルトの「クラリネット協奏曲」と「クラリネット五重奏曲」でしょう。特に「協奏曲」の方は、他の作曲家にも優れた「クラリネット協奏曲」はあるものの、大多数の方は、「クラリネット協奏曲」と言えばこのモーツァルトの作品を思い起こすでしょう。そこはかたない哀しみが全曲の底を流れますが、それはまた微笑みとユーモアに包まれています。クラリネットの使い方も凝ったものがあり、特に音域による音色の違いが生かされています。

フィンランドの作曲家、シベリウスの七つの交響曲の中で最も広く親しまれている第2交響曲は、1902年に完成し、同年2月にヘルシンキで作曲者自身の指揮によって初演されました。シベリウスの音楽は、森と湖の国フィンランドの自然、人々、歴史の歌です。フィンランドの伝説に基づいた多くの作品もあります。ほの暗い伝説の世界への関心は、フィンランドの自然への賛美とともにシベリウスの音楽の特徴を成しています。シベリウスのもう一つの特徴は、その民族主義です。シベリウスの作品の中で最も有名な、交響詩「フィンランディア」は、ロシアの圧制に対する強い抵抗精神を表していますが、この第2交響曲にも同様の精神が流れています。美しい自然とそれを脅かすもの、その戦いと勝利、傷付き倒れていった者への鎮魂と賛美が力強く描き出されて行きます。